

ザイン・アッディーン・マアバリー・マリーバーリー著

『ポルトガル人の状況に関するジハード  
戦士の贈り物』 訳注（3）

谷 口 淳 一

[21 (201)]

第2章 マラバル<sup>1)</sup>におけるイスラーム勃興の始まり<sup>2)</sup>

それは以下の通りである。ユダヤ教徒とキリスト教徒の一団が、一族や子供とともに1隻の大きな船に乗って、マラバルの地の王の居所であるクランガノール<sup>3)</sup>という町にやって来た。彼らは王に<sup>4)</sup>土地と果樹園、家屋を求め、そこに住み着いた。それから何年か後に、セイロン (Sīlān) にある我が父祖アダム (Ādam) ——彼に平安あれ——の足跡への参詣を目指して、ムスリムのスーフィーたち (fuqarā') の一団が、一人の長老とともに到来した。

彼らの到来を聞き知った王は、彼らを招きもてなして、いろいろな情報を求めた。そこで長老は、我が預言者ムハンマド——神が彼に祝福と平安を与えんことを——のこと、イスラーム教、月蝕の奇跡について王に語った。誉れ高き神は、王の心に預言者——神が彼に祝福と平安を与えんことを——が真実を語っているという考えをもたらしした。そして、

\*本稿は『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』第2章 [Tuḥfa/L: 21-27] の日本語訳注である。原典と著者、訳注作成の方針などについては、「ジハード戦士の贈り物 (1)」および「谷口2012」を参照されたい。

- 1) 著者による序文に示された目次では、「マラバル地方」(Diyār Malībār) と記されている [Tuḥfa/L: 7 (215)；ジハード戦士の贈り物 (1)：94頁]。
- 2) 訳者が入手した写真版を見る限り、A・D両写本は第2章冒頭以降のみが現存している。第2章以降については、A～Dの4写本を参照した。
- 3) Kudungallūr (Cranganur)。マラバル海岸中部、コーチンの約40km北に位置する港市。
- 4) 王に：原文は min-hu (彼に)。ただし、B写本 [f. 121a] とC写本 [p. 20] では前置詞 min のみが記されている。

王は預言者を信じ、彼の心の中に預言者——神が彼に祝福と平安を与えんことを——への愛が宿った。王は、彼らとともに〔国を〕出るために、アダム——彼に平安あれ——の足跡を参詣した後に同行者たちとともに戻ってくるよう長老に命じ、この秘密をマラバル人たちに話すことを禁じた。

彼らはセイロンへ行き、王の許へ帰ってきた。そこで王は長老に、彼が旅をするための船を、誰にも知られることなく準備するよう命じた。[22 (200)] 前述の港市には、外国商人たちの船が数多くあった。そこで、その長老がある船主に、彼とスーフィーの団がその船主の船に乗ろうと考えていると伝えたところ、船主は同意した。旅立ちの時が近づくと、王は、一族の者や大臣たちに、7日の間、誰一人として自分の許へ入ってこないよう命じた。そして、彼の国のあらゆる町に人を割り当て、彼らの誰一人として自分に割り当てられた境界を越えることがないように、境界を詳しく説明した文書を各人のために書き記した。以上の話は、マラバルの不信仰者たちの間でもよく知られている。彼は、南端のコモリン<sup>5)</sup>から北端のカサラゴド<sup>6)</sup>に至るマラバル全土を支配する王であった。

さて、ある夜、王は長老とスーフィーたちとともに船に乗った。船は出発してファンダライナ<sup>7)</sup>に到着し、王は下船して一昼夜そこに留まった。そこから船はダルマファッタン<sup>8)</sup>へ行き、彼は下船して3日間そこに留まった。そこから船はシフル<sup>9)</sup>へ行き、彼と同行者はそこで下船した。

長い時間が経った後、ある団が<sup>10)</sup>マラバルにモスクを建てイスラム教を布教するために、王に同行してマラバルへ旅をするようになった。

5) Kumhrī (Comorin). インド最南端の地。

6) Kāṅṅarakūt (Kasaragod). マラバル海岸北部、カナノールの約70km北に位置する港市。

7) Fandarayna/Fandarīna. マラバル海岸北部、カナノールとカリカットの間に存在した港市。正確な位置は不明 [Nainar 1942: 34–35; 大旅行記: 6 卷176–177頁 (注138)]。

8) Darmafattan. マラバル海岸北部、カナノールの約20km南に位置する河口の島にあった港市。現在のDharmadamに比定される。Dharmapatam, Dah Fattanとも呼ばれた [Nainar 1942: 32; 大旅行記: 6 卷174頁 (注127)]。

9) Šīhr. アラビア半島のハドラマウトにある港市。

10) ある団が (ḡamā'a) : *Tuḥfa/L*ではこの語の直前に接続詞wa (そして) が記されているが、そのままでは文意が取りにくい。写本B [f. 121b]、写本C [p. 21]に従い、この接続詞を除いて読む。

ところが、王は病に罹り、その病はひどくなっていった。そこで王は、同行者たち、すなわちシャラフ・ブン・マーリク (Šaraf b. Mālik)、彼の同腹の兄弟マーリク・ブン・ディーナール (Mālik b. Dīnār)、彼の甥マーリク・ブン・ハビーブ・ブン・マーリク (Mālik b. Ḥabīb b. Mālik) 等に、[23 (199)] 自分が死んだ後に遅滞なくインドへ旅立つよう指示した。すると彼らは言った。

「私たちは、あなたの根拠地も支配地の範囲も知りません。しかしながら、何よりもあなたに同行して旅をしたかったのです」。

そこで王はしばらく考え、彼らのためにマラバルの文字で1枚の文書を認め、その中に彼の〔支配下にある〕場所、彼の一族<sup>11)</sup>、マラバルの王たちの名を明記した。そして彼らにクランガノール、ダルマファッタ、ファンダライナ<sup>12)</sup>、クイロン<sup>13)</sup>のいずれかに上陸するよう命じたうえで言った。

「私の病気がひどいことを、そしてもし私が死んでも、私の死をマラバル人の誰にも知らせないように」。

そして王は亡くなった——神が彼に広大な慈悲をかけんことを——。何年かの後、シャラフ・ブン・マーリク、マーリク・ブン・ディーナール、マーリク・ブン・ハビーブ、彼の妻クムリーヤ (Qumrīya) 等が子供と従者たちを伴い、船に乗ってマラバルへと旅立った。船はクランガノールに着き、彼らはそこに上陸した。彼らは、亡くなった王の文書をその王に渡したが、王の死の情報は伏せておいた。その王は、文書を読み内容を承知すると、そこに書かれていた要請に従って土地と果樹園を彼らに与えた。彼らはそこに留まり、モスクを建てた。マーリク・ブン・ディーナールはそこに住み着き、自分に代わってマラバルにモスクを建てる役目を甥のマーリク・ブン・ハビーブに与えた。

そこでマーリク・ブン・ハビーブは財産をもって、妻と幾人かの子供を連れて出発し、クイロンへ行き、そこにモスクを建てた。そして、妻

11) 一族 (aqribā) : *Tuhfa/L* では語頭のハムザが欠けているが、いずれの写本にも記されている [ms. A: f. 2 b ; ms. B: f. 122a ; ms. C: p. 22 ; ms. D: f. 5 a]。

12) *Tuhfa/L* では綴りの後半が乱れているが、いずれの写本でも Fandarayna と読める [注11に同じ]。

13) Kūlam (Quilon). マラバル海岸最南部、コーチンの約120km南に位置する港市。

をそこに残して出発し、[24 (198)] ヒーリー・マーラーウィー<sup>14)</sup>へ行き、モスクを建てた。そこを出発してファーカヌール<sup>15)</sup>へ行き、モスクを建てた。そこからマンガロール<sup>16)</sup>へ戻り、モスクを建てた<sup>17)</sup>。そこを出発してカサラゴドへ行き、モスクを建てた。そこからヒーリー・マーラーウィーへ行き、3ヶ月間滞在した。そこからジュルファッタン<sup>18)</sup>へ行き、モスクを建てた。そこからダルマファッタンへ行き、モスクを建てた。そこからファンダライナへ行き、モスクを建てた。そこからチャリヤム<sup>19)</sup>へ行き、モスクを建てて5ヶ月間滞在した。そこからクランガノールの叔父マーリク・ブン・ディーナールの許へ行った。その後、上述のモスクへ行き、すべてのモスクで礼拝をおこない、不信仰<sup>20)</sup>に満たされた土地でイスラーム教が興ったことを神に感謝し、神を称えつつクランガノールへ戻ってきた。

マーリク・ブン・ディーナールとマーリク・ブン・ハビーブは仲間と奴隷たちを連れて出発し、クイロンへ行った。彼らはそこに住み着いたが、マーリク・ブン・ディーナールと一部の仲間はシフルへと旅立ち、そこで亡くなった王の墓所を詣でた。そして、マーリク〔・ブン・ディーナール〕はホラーサーン (Hūrāsān) へ行き、そこで没した。マーリク・

14) Hīlī-Mārāwī. カナノールの北西25kmにある小高い丘とその周辺を指す地名。現在のEzhimalaに当たる [Nainar 1942: 39-40; *Tuḥfa\_trans/N 2*: 114-115 (n. 16); 大旅行記: 6巻170頁(注112)]。

15) Fākanūr. マンガロールの約70km北に位置する港市。現在のBarkurに比定される [Nainar 1942: 33-34; *Tuḥfa\_trans/N 2*: 115 (n. 17); 大旅行記: 6巻167頁(注100)]。

16) Maṅgalūr (Mangalore). マラバル海岸北部の港市。

17) *Tuḥfa/L*では、この後に「そこからダルマファッタンへ行き、モスクを建てた」という一文があり、*Tuḥfa\_trans/L*でも訳出されている [p. 22]。しかし、少し後のジュルファッタンとファンダライナの記述の間にも同じ文がみえる。写本では後者の位置にのみこの文がみられるため [ms. A: f. 3 b; ms. B: f. 122b; ms. C: p. 23; ms. D: f. 5 b]、*Tuḥfa/L*のみにみえる一文は誤記と判断し、削除して訳出した。

18) Ġurfattan. カナノールの約10km北西でアラビア海に流れ込むValarpattanam川の河口にあったと推定される港市 [Nainar 1942: 40-41; 大旅行記: 6巻172頁(注120)]。

19) Šāliyāt (Chaliyam). カリカットの約10km南でアラビア海に流れ込むChaliyam川河口に位置する港市 [Nainar 1942: 73; 大旅行記: 6巻193頁(注216)]。

20) 不信仰: *Tuḥfa/L*では *kufarā'* (不信仰者たち?) と読めるが、写本 [ms. A: f. 3 b; ms. B: f. 122b; ms. C: p. 23; ms. D: f. 5 b] に従って、*kufr-an* (不信仰[非限定対格]) と修正して読む。

ブン・ハビーブと妻は、[25 (197)] 幾人かの子孫をクイロンに残してクランガノールへ戻り、二人ともそこで没した。

以上が、マラバルの地におけるイスラーム教勃興の始まりの話である。しかしその年代については、我々の間では明確になっていない。おそらく、それは預言者のヒジュラ——その主に最良の祝福と挨拶があらんことを——より200年後のことに過ぎないであろう。

他方、マラバルのムスリムたちの間でよく知られている<sup>21)</sup>のは、以下のような話である。

前述の王がイスラームに入信したのは、預言者——神が彼に祝福と平安を与えんことを——の時代で、それは、ある夜に月蝕を見てのことであった。彼は、預言者——神が彼に祝福と平安を与えんことを——の許へ行って面会の光栄に浴し、前述の一团とともにマラバルを目指してシフルまで戻ってきたが、そこで没した。

以上の話には、ほとんど真実が含まれていない。人々の間で現在よく知られているところによると、この王はシフルではなくズファール<sup>22)</sup>に埋葬されている。現地ではその墓は有名で祝福があるとされている。その地域の民は、その王をザモリンと呼んでいる<sup>23)</sup>。前述の王が行方をくりました話は、ムスリムであれ不信仰者であれ、すべてのマラバルの民の間でよく知られている。ただし、不信仰者たちは、その王は天へ昇っていったと言って、王が降りてくることを待ち望んでいる。それゆえ、彼らは、[26 (188)<sup>24)</sup>] 彼らの間で周知の夜になると、クランガノールのとある場所に下駄と水を用意し、そこを飾り立てるのである。

彼らの間では、以下の話もよく知られている。その王は旅立ちが近づくと、臣下たちに自分の支配地を分け与えた。しかし、港市カリカット

21) よく知られている (ištahara) : *Tuhfa/L*では ašharu (最も知られている) と読めるが、写本 [ms. A: f. 4 a ; ms. B: f. 123a ; ms. C: p. 24 ; ms. D: f. 6 a] に従って読む。

22) Zufār. 現在のオマーン国南部に広がる地域。王が埋葬されたとされている場所は、ズファールの主要港市であるMirbātあるいはRaysūtであろう。

23) ザモリン (al-Sāmūrī) とは、本書でも後述されるように、カリカットなどを領有した支配者の称号である [「ザモリン」『南アジアを知る事典』]。ところが、ズファールの人々は、イスラームに入信しマラバルを去った王の方をザモリンと呼んでいるというわけである。

24) *Tuhfa/L*のPDF版189-196頁には刊本の18-25頁が重複して掲載されている。( ) 内に示したPDF版の頁数が連続していないのは、そのためである。

(Bandar Kālikūt)の第一の支配者であったザモリンには与えられなかった。というのも、彼は分与の際に不在だったからである。ザモリンが姿を現すと、王は彼に剣を与えて「これを振るって、〔支配地を〕手に入れよ」と言った。そこで彼は王の言葉に従って行動し、やがて<sup>25)</sup>カリカットを手に入れた。そこにはムスリムが住み着き<sup>26)</sup>、さまざまな地域から商人や職人たちがそこへ到来し、商業が盛んになった。そしてついにカリカットは大きく偉大な都市となり、さまざまなムスリムと不信仰者たちが集まってきた。ザモリンの力は、マラバルの支配者たちの中で際立つようになった<sup>27)</sup>。

マラバルの支配者たち (ru'āt, sg. rā'in) はすべて不信仰者で、強い者もいれば弱い者もいる。しかし、強い者が弱い者の領土を力づくで奪うことはない。これは、イスラームに改宗した彼らの大王 (malik-hum al-kabīr) が指示し、それを〔神に〕祈願したことによるものであり、預言者——神が彼に祝福と平安を与えんことを——と彼の教えが与えた祝福によるものである。彼らの中には、1 ファルサフ<sup>28)</sup>〔四方〕の領地しかない者もいれば、それ以上の者もいる。せいぜい100人、あるいは200人、300人の軍団しかない者、1,000人、さらに5,000人、10,000人の軍団を持つ者、〔27 (187)〕さらに30,000人、100,000人、あるいはそれ以上の軍団を持つ者もいる。いくつかの国 (buldān) は、二人か三人またはそれ以上の者が共同〔で統治〕しているが、そのうちのある者は他の者たちより力があり軍団も大きく、彼らの間では戦いや敵対が生じることもある。それにもかかわらず、共同〔統治〕という状況は変わら

25) やがて (ba'da zamān) : *Tuhfa/L*では、この句の直前に接続詞 wa (そして) が記されているが、4写本ともそこには記されておらず、A、B、Cの3写本ではこの句の直後に記されている [ms. A: f. 4 b; ms. B: f. 123b; ms. C: p. 25; ms. D: f. 6 a]。この3写本に従って読む。

26) *Tuhfa/L*では、この前後の文を区切る接続詞が記されていないが、A写本 [f. 4 b] およびC写本 [p. 25] には、接続詞 wa (そして) が記されている。両写本に従い、この前後を区切って読む。

27) 以上のようなマラバルの王のイスラーム入信からザモリンの台頭に至る説話は、16世紀初頭にポルトガル領インドで書記として活動したバルボサ (1521年没) も言及している [バルボサ: 501–502頁]。また、海を渡って到来した人物の導きで在地の支配者がイスラームに入信し、ついには支配権を委譲して国を去るという説話は、モルディブ諸島など環インド洋地域各地に存在する [家島 2017: 159–162, 175–176頁]。

28) farsah, 距離を表す単位。1ファルサフはおおよそ4–6 km。

ない。

彼らのうちで最大の軍団を有する者は、クイロンとコモリンおよびその間の地の支配者ティルワディー<sup>29)</sup>である。両地の東方には、多くの王国がある。その次〔に大きな軍団を擁するの〕は、ヒーリー・マーラーウィー、ジュルファッタン、カナノール、エダツカド<sup>30)</sup>、ダルマファッタン等の支配者コーラッティリ<sup>31)</sup>である。しかし、彼らのうちで最も力があり名高い<sup>32)</sup>のは、ザモリンであり、彼らの中で際立っている。それは、イスラーム教の祝福によるもので、彼がムスリムたち、特に外国から来たムスリムを愛し厚遇したためである。しかし、不信仰者たちはというと、それは前述の王が件の剣を彼に与えたからであると主張している。彼らの主張するところによると、その剣はザモリンの許に今日まで存在し、尊重され偉大視されている。彼が戦争や重要な集会のために出て行くときは、彼の前を剣が運ばれて行くのである<sup>33)</sup>。ザモリンが力のない支配者たちの一人と何らかの理由で戦った場合、後者は、必要に迫られると、財貨か領土の一部をザモリンに差し出す。後者が差し出さない場合でも、それがたとえ長期間にわたろうとも、ザモリンは、実行する力があるにもかかわらず、力づくで支配することはない。これは、マラバルの民が古来の慣習としきたりを尊重し、それらに背くのはまれだからである。ザモリン以外〔の支配者たち〕は、可能でさえあれば、人々を殺害し国々を荒廃させるためだけに戦争をしている。

29) Tirwadī. マラバル南部、トラバンコール地方の支配者が帯びた称号。

30) Idakkād (Edakkad). カナノールの約13km南に位置する港市。

31) Kūlattirī (Kōlattiri). カナノール周辺を領有した支配者の称号。

32) 最も名高い (ašhar-hum dīkr-an) : *Tuhfa/L* では、dīkr が非限定対格であることを示すアリフ (-an) が記されていない。D写本 [f. 6b] に従い、アリフを補って読む。

33) この慣習については、バルボサも言及している [バルボサ：515頁]。

文献および略称

『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』 テキスト・翻訳

〈写本〉

Ms. 2799. British Library. (India Office旧蔵 Loth 1877: no. 714) [ms. A (A写本)]

Ms. 2807. British Library. (India Office旧蔵 Loth 1877: no. 1044-V) [ms. B (B写本)]

Ms. Arabic 28. Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland. (Morley 1854: no. IV) [ms. C (C写本)]

Ms. Add. 22375. British Library (British Museum旧蔵 Cureton 1846-71: no. 945) [ms. D (D写本)]

〈刊本〉

*Historia dos Portugueses no Malabar por Zinadim*. Ed. and trans. David Lopes. Lisboa: Imprensa Nacional, 1898. [*Tuḥfa/L*]

*Tuḥfat al-muḡāhidīn fī ba'd aḡbār al-Purtukāliyyīn*. Ed. al-Ḥakīm al-Sayyid Šams Allāh al-Qādirī. Haydarābād: Maṭba' al-Tārīḡ, [1931]. [*Tuḥfa/Q*]

*Tuḥfat al-muḡāhidīn fī aḡwāl al-Burtuḡāliyyīn*. Ed. Muḡammad al-Sa'īd al-Tārīḡ. Bayrūt: Mu'assasat al-Wafā', 1985. [*Tuḥfa/T*]

〈翻訳〉

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マアバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』 訳注（1）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』15号（2016年）：87-97頁。[ジハード戦士の贈り物（1）]

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マアバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』 訳注（2）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』16号（2017年）：33-54頁。[ジハード戦士の贈り物（2）]

*Historia dos Portugueses no Malabar por Zinadim*. Ed. and trans. David Lopes. Lisboa: Imprensa Nacional, 1898. [*Tuḥfa\_trans/L*]

*Tuḥfat-al-mujāhidīn: An Historical Work in the Arabic Language*. Trans. S. Muhammad Husayn Nainar. Madras: University of Madras, 1942. [*Tuḥfa\_trans/N1*]



*Tuḥfat al-mujāhidīn: A Historical Epic of the Sixteenth Century*. Trans. S. Muhammad Husayn Nainar. [Eds. P. K. Koya Kutty and A. I. Vilayathullah] Kuala Lumpur: Islamic Book Trust, 2006. [*Tuḥfa\_trans/N 2*]

### 辞典・目録類

辛島昇他監修『南アジアを知る事典』新訂増補、平凡社、2002年。〔南アジアを知る事典〕

Cureton, William, and Charles Rieu. *Catalogus codicum manuscriptorum orientalium qui in Museo Britannico asservantur*. Pars 2. Londini: Impensis Curatorum Musei Britannici, 1846 – 71. 3 vols in 1 vol. Hildesheim: Georg Olms, 1998. [Cureton 1846 – 71]

Loth, Otto. *A Catalogue of the Arabic Manuscripts in the Library of the India Office*. London, 1877. [Loth 1877]

Morley, William Hook. *A Descriptive Catalogue of the Historical Manuscripts in the Arabic and Persian Languages, Preserved in the Library of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*. London, 1854. [Morley 1854]

### 史料・史料訳注

イブン・バットゥータ『大旅行記』イブン・ジュザイイ編、家島彦一訳注、全8巻、平凡社〈東洋文庫〉、1996–2002年。〔大旅行記〕

ドゥアルテ・バルボサ「マラバル地方について」生田滋訳、トメ・ピレス『東方諸国記』（大航海時代叢書 第1期5）生田滋他訳注、岩波書店、1966年：499–549頁。〔バルボサ〕

### 研究

谷口淳一「中世南インドのムスリム知識人——ザイン・アッディーン・マアバリー著『ポルトガル人の諸情報におけるジハード戦士の贈り物』に関する覚え書き——」森部豊・橋寺知子 編著『アジアにおける文化システムの展開と交流』関西大学出版部、2012年：231–243頁。〔谷口2012〕

家島彦一『イブン・バットゥータと境域への旅——「大旅行記」をめぐる新研究——』名古屋大学出版会、2017年。〔家島2017〕

Nainar, S. Muhammad Husayn. *Southern India as Known to Arab Geographers*. New Delhi: Cosmo, 2004. Rpt. of *Arab Geographers' Knowledge of Southern India*. 1942. [Nainar 1942]